

# 妹尾韶夫(アキ夫)邸に示された西村伊作の住宅設計理念

川崎 衿子\*

## The Housing Ideas of Isaku Nishimura in the Senoo Residence

Eriko KAWASAKI

Isaku Nishimura (1884~1963) is well-known as founder of a high school and college named "Bunka Gakuin" in Tokyo and as an architect advocating new idealism on houses in the early 1900's. He was born in Shingu, Wakayama and raised by an eager Christian family.

He introduced western houses in order to innovate the old Japanese style in housing. He insisted that the living room be the most important room in a house. In addition he tried to adapt the Western way of sitting on chairs, sleeping on beds and eating in the manner of westerners. He especially evaluated American bungalows that had a living room planned in the center of the house. He established Nishimura Architects Office in Kobe and Tokyo in 1921.

At the same time Akio Senoo (1891~1962) who was a translator of English novels and also known as a mystery story writer admired western houses and western life-style. Senoo received recognition for his psychological description of the protagonist. In his works we can find fantastic and illusional atmosphere which depended on using lots of words to describe the architecture, a part of a building or elements of interior design with technical knowledge. Senoo ordered Nishimura to design and construct his house in 1931. The Senoo Residence completed the next year in Kawasaki-shi was a typical bungalow. That was a great example showing Nishimura's accomplishment as seen in the history, of Japanese houses.

This study illustrates how the common attitude and spirit of embracing Western life-style by Nishimura and Senoo was approved through their works.

### 1 はじめに

1868年明治新政府の成立とともに、時の政府は新しい社会構築の規範を西欧諸国に求め急速な欧化政策を掲げた。堰を切ったように移入された西洋文化への傾倒は、上流社会か

らやがては一般社会へと裾野を広げ、大正期には生活の洋風化志向が顕著な社会現象として表出されるようになった。

本来、政治的、社会的運動から出発した大正デモクラシーの思想は自由主義や個人主義への意識を高めさせ、さらに人道主義や文化主義に基づく新価値観を芽生えさせて人々に閉塞的な旧来の価値観からの脱却を促した。

---

\* かわさき えりこ 文教大学教育学部学校教育課程

この大正デモクラシーを背景に意識改革，生活改善を唱える新しいメディアが生まれ<sup>[1]</sup>，また公的機関先導による生活改善運動，啓蒙活動の数々が活発化した<sup>[2]</sup>。科学的実証を伴ったこれらの動向は生活向上意欲に刺激をもたらして新時代への期待感を膨らますこととなった。

この時期にプロテスタンティズムを立脚点として日本住宅の後進性を指摘し，新しい時代に相応しい住宅理念を掲げた建築家の一人に西村伊作（1884～1963）がいた。彼は和歌山県・新宮町（現新宮市）でクリスチ안의家庭に生まれ，父の理想とする洋式生活，いいかえれば何事も西洋人宣教師を手本にした宗教的生活，西洋模倣の生活環境の中で幼少期を過ごした。この原体験が後に，西村の西洋文化に対する自己同化形成に強く影響したことは想像に難くない。

1915（大正4）年，自身の経験と工夫，知識をもとに自邸を建て，自ら洋式生活を実践して，これを理想的生活と世に示した。この家に西村は多くの知識人，文化人を招いた。このサロンで歌人・与謝野寛・晶子夫妻，画家・石井柏亭，彫刻家・安田龍門，陶芸家・富本憲吉，作家・佐藤春夫をはじめ当時の精神思潮界を先導する芸術家たちと交流をもった。この人脈は後の「文化学院」創設へとつながっていった。

西村伊作は建築設計活動の実践を彼の身近な交友関係から出発させた。一時の休刊のあと与謝野夫妻が中心になって1921（大正10）年に雑誌『明星』が再刊された時，西村は「『家』のこと」と題した建築論の連載を開始した。ほぼ毎号16回にわたって執筆を担当して『明星』読者の関心を集めた。

一方，文学界において白樺派が掲げた理想主義は文壇に爽やかな新風を送り，いわゆる大正文学の幕を開いて多方面からの西洋文化を紹介した。大正教養主義といわれたこのような動きと重なるかのように，青年向けの教

養雑誌『新青年』が1920（大正9）年に創刊された。

当初は海外の探偵小説の翻訳，紹介を特色としていたが，『新青年』は時代の要求に応じて次第に推理小説，探偵小説を率いる中心的雑誌へと発展していった。昭和初期には一般文芸，漫画，映画，ファッションまでを取り込んだモダニズム文化の拠点として熱心な読者層を抱え，一世を風靡したとまでいわれるようになった。また，江戸川乱歩を世に出したことで知られ，昭和25年に廃刊されるまで30年以上にわたって多くの探偵小説家，推理小説家を輩出した。

初代編集長・森下雨森（1890～1965）が起用した翻訳家の一人，妹尾アキ夫（本名韶夫）は創刊当初から『新青年』に関わり主にイギリスの作品を翻訳する一方，自身の創作活動でも意外性のあるファンタスティックな犯罪小説を著した<sup>[3]</sup>。その哀愁に満ちた雰囲気は，「一緒に顔を並べた凡百の訳者に比べると一味ちがう色彩と香気をもっていた<sup>[4]</sup>」あるいは「怪奇と幻想を中核に，滋味をたたえた筆致で哀愁の美を描いている<sup>[5]</sup>」と評されている。

妹尾は1931（昭和6）年，西村伊作が主宰する西村建築株式会社に設計を依頼した。翌年設計図面が整い，6月に着工，7月に上棟式を挙行，9月に竣工と進み，木造平屋，外壁は下見板張り白色ペンキ塗りの洋風外観の自邸が完成した。内部はすべて洋室で構成されており，居間を中心に他の部屋を周辺に配した「居間中心型住宅」であった。平面図に記された室名はすべて英語表記であり，このことも妹尾の嗜好と合致するものがあつたと想像される。

神奈川県川崎市上丸子（現川崎市中原区上丸子）の辺り一帯畑や空き地が続く中，ひときわ目立つ洋風住宅が出現した。周囲は建物の影が遠くに見えるだけの未開発地であった。換言すれば田園風景の中の洋風住宅は，とりもなおさず西村が提唱するバンガロースタイ

ルが色濃く反映されたものであった。

本報では西村伊作の住宅設計・住宅理念と妹尾アキ夫の作品の対照を試み、両者に共通する西洋文化受容の態度と精神性の考察を試みた。

## 2 西村伊作の住宅理念

### (1) 西村伊作について

西村伊作は1884(明治17)年和歌山県新宮で名家といわれるクリスチャンの家庭に生まれた。父・余平は新宮にはじめて宣教師を招くなど、キリスト教に積極的な行動を起こした人物であった。熱い信仰心から生活行動の断片のみならず、衣食住のすべてにおいて宣教師の生活様式を模倣した。この後、一家は移り住んでいた愛知県で1891(明治24)年に起きた濃尾地震に遭遇し、伊作は父母を失うという不幸を負った。

1895(明治28)年、余平の弟・大石誠之介(1867～1911)が5年の遊学を終えてアメリカから帰国した。大石は余平の遺児の養育に強い責任を感じ、ことのほか伊作に目をかけ自宅に同居させて後見役を務めた。幼少期に両親のもとで洋式生活を体験した記憶は、アメリカ帰りの叔父との生活でさらに濃密によりみがり、伊作を極端ともいえる「西洋かぶれ」へと走らせた。洋食に凝り、特別仕立ての洋服を好み、英語を習い、さらには西洋人のように靴を脱がない生活を断行しようとした。

共有する理想郷を求めて大石と伊作は洋式生活の実行とともに西洋近代思想を啓蒙する事業を興したが<sup>(6)</sup>、やがては大石は思想的に先鋭化して革命を先導する社会主義者へと変貌し、その結果大逆事件に関わった咎で逮捕され、幸徳秋水以下11名の一人として1911(明治44)年死刑に処せられてしまう。

一度は社会主義運動の波をかぶった西村が次に目標としたのは「理想の家庭」建設であっ

た。1907(明治40)年に結婚して彼は妻に西洋人の教養を求め、西洋料理、西洋洗濯、西洋裁縫、西洋家事や英語を教え込んだ。「伊作は生活の西洋化を西洋の『システムを取り入れる』と表現した。単に西洋の事物を断片的に取り入れるのではなく、彼は初めから生活全体の雰囲気西洋的なものに変えることを意図していた<sup>(7)</sup>」とされるようにあくまでも洋式に生活することに強く拘泥した。

また「私は子供の時から西洋風の家が大好きでした。大きくなったら屹度、ああ云う家に住みたい、白いテーブルクロスを掛けた食卓に美しい花を生けて、楽しい食事をしよう。軒には蔓草であゝ云う風に緑の日覆を作らう。カナリアの籠のかゝった窓から白いレースの窓掛を通して日光が射し込んで居る家に住みたい、などと思ひました<sup>(8)</sup>」と記したように洋式生活の虜になった彼の家庭生活の原点は幼少時代の思い出であった。

西村少年を魅了した西洋人の住まいは来日宣教師が示したクリスチャン・ホームであった。宣教師を派遣した彼らの本国では、敬虔なキリスト教徒が住む家は信仰の深さと教養の証としての形式が整えられていた。「簡素で清潔な佇まい、磨きのかかった白壁、優美で控え目な心遣いを感じさせるフリル付きカーテン、花の絶えない庭先などである。クリスチャンホームの外形は、たとえ大都会であっても、どこかしら農村的な小世界の秩序を表現することが理想とされた<sup>(9)</sup>」。

追憶の彼方にある両親を敬慕して郷愁の思いを募らせる西村の気持ちは、次の記述からも窺い知ることができる。「私は習慣を破って新しい試みをして居るやうだが、實は親の後継を続けているだけなのであります。然し私は親のした程に熱烈に生活革新を為し續けていく力はないと思ひますが...<sup>(10)</sup>」と懐古の中に揺るぎのない価値観をみることができる。

## (2) 住宅設計の意欲とバンガロー

1915(大正4)年、西村は新宮にスイスのシャレー風といわれる自邸を竣工させた。アメリカの家庭雑誌から情報を得て、設備機器や家具調度品をアメリカから取り寄せ、当時としては超近代的ともいえる住宅を出現させた。彼には建築の専門教育を受けた経験はなかったが、この住宅の設計監理の経験をもとに、1919(大正8)年に最初の著作『楽しき住家』が刊行された。この自邸の著作の宣伝効果は大きく住宅設計の受注も増え、1921(大正10)年には兵庫県・御影に「西村建築事務所」を開設して建築活動を本格化させた。と同時にこの年には東京・駿河台に文化学院を創立した。自分が設計する「これからの家」の住民となるに相応しい人間を育てる意欲を秘めて、西村は自分の理想教育を主唱した。与謝野寛・晶子夫妻を中心に、時代の先端をゆく蒼々たる文化人を教員に迎えて独自の教育を開始した。この頃から著作も盛んになり<sup>11)</sup>生活の場は徐々に東京へと移り、1927(昭和2)年には銀座に西村建築事務所を設けた。

これより遡って1906(明治39)年、西村は23歳の時、わが国の住宅史上特筆すべき最初のバンガローを新宮に建てた<sup>12)</sup>。

わが国の伝統的住宅がもはや時代遅れであると、その後進性が指摘されはじめた明治末から大正期にかけて、住宅改良を考え生活の近代化を唱える先駆者たちは、住宅のモデルを西洋の住宅に求めた。その一つが1900年代初頭アメリカ・カリフォルニアを中心に流行していたバンガローといわれる住宅形式であった。バンガローは自然の環境に囲まれた郊外地に適した木造平屋で、居間中心の簡素なつくりを特徴としており、経済的で実質本位の庶民住宅であった。緩やかな大きな屋根と、周囲にめぐらされたヴェランダ、テラスを備え屋外空間とも融和的につながり、開放的で便利なこの小住宅形式は、日本の気候風土と日本人の趣味趣向に適する西洋の住宅として

注目された。

西村は自分が手がけたバンガローで新婚生活を送った。洋館とは上流社会の人々によって造られる豪奢で広大な邸宅であるというイメージを超えて、彼は小さな洋館を造り、そこで生活を楽しむ独自の世界を生みだした。彼はバンガローをはじめ、西洋の近代住宅をわが国の中流住宅のモデルとして推奨したが、その中心的理念は常に「農民風の文化生活」であった。自然に沿った簡素な田園生活を実行し、世界に通用する精神と生活態度をもちつつ芸術的な素養を楽しむ雰囲気、これらがあらゆる住宅で優先されるべき条件と考えた。その根底には故郷で垣間見た宣教師の暮らしへの羨望と憧憬が流れている。

『楽しき住家』において、「住宅のスタイルについて」で彼は先進的住宅のスタイルを次のようにあげている。

- ・イングリッシュコテージ
- ・コロニアルスタイル
- ・スイス・コテージ
- ・ログ・キャビン
- ・現代住宅
- ・セセッション
- ・ヌーボー式
- ・ミッションスタイル
- ・バンガロー

いずれも近代住宅史を概観する上で重要な住宅形式であるが、西村はなかでもバンガローに対して「我々が西洋生活に入るのには、此のバンガローが一番良いものだと思います<sup>13)</sup>」と最大の評価を下している。

## (3) バンガローの推奨

バンガローについての西村の主張は『楽しき住家』に先んじて住宅会社・あめりか屋発行の雑誌『住宅』に掲載されている。そこには極端ともいえる程に熱烈に洋風住宅を普及させて、何としても洋式生活を実現させたかった彼の主張が切に著わされている。

「日本人が追々世界共通の風俗習慣に従はなければならないのは分かり切ったことであるが、今の處では外出の時など洋服を着ても、歸宅すれば、玄関からボタンを外しつゝ入り、直ちに和服に着がへると云ふ風に、家屋の構造が昔のまゝであるから、日本の家庭の有様は何時迄も世界共通の形式をとることが出来ない。学校や商館や官署がいくら西洋風になつても、住宅が日本式で世界共通の習慣や方式をすべて排斥するものであるならば、我々は何時迄も二重の様式に生活せなければならぬのみならず、日常生活の方法が全く世界共通的でなく、今の様な変なものである時には、自然、我々の思想感情等も世間の狭いものとなり、海外文明諸國からまゝ子扱い、骨無扱いにせられると思ふ<sup>14)</sup>」と精神においても行動、習慣、生活環境においてもわが国の伝統を強く否定し、キリスト教を精神基盤に形成された近代西洋の生活様式へと移行することを急務としている。

さらに「我々日本人が生活を世界的にするため、住宅を改めて洋風にするのには此のバンガローが最も都合がよいものだと思ふ。今迄我國で西洋館と稱して建てられあのペンキ塗りの四角な家は全く我々日本人の趣味に反した、雅致のない、いやな感じのする、周囲と調和のないものであるが、バンガローは殆ど凡ての點が日本人向きで我々の趣味と共通する<sup>15)</sup>」と続き、新しい時代の住宅形式としてバンガローが最も日本人に適合したものであると述べている。

西村の住宅論はその多くの著作とともに、彼の理想に共鳴する生活改革意欲の高い人たちに受け入れられた。

本報告で採りあげる妹尾韶夫と西村伊作との出会い、さらに妹尾が西村に設計を依頼したいきさつについては不明であるが、1932(昭和7)年に建てられた妹尾邸は、西村の提唱したバンガローの特徴を明解に備えた住宅として現存している。西洋文化受容に積極

的に傾いた時代の証左として貴重なものと考えることができる。

### 3 妹尾アキ夫の作品の中に現れる住宅

#### (1) 妹尾アキ夫について

妹尾アキ夫は本名韶夫といい、1891(明治25)年、岡山県津山に生まれた。早稲田大学英文科を卒業後、ほどなく翻訳家の道を歩みだし横浜市本牧に住むこととなった。本牧に居を定めたのは、西洋文化の雰囲気になしでも接したかったためと、当時船便で着く洋書を一刻も早く入手したかったためではないかと氏の子息・丸夫氏は述べている。

1928(昭和3)年に結婚、当時は攻玉社学園の英語教師をしていた。教師・妹尾韶夫は飄然とした様子や散歩好きから生徒たちから「サンボ」と称されていたらしい。

妹尾は作品の中で登場人物の心理描写に建築を巧みに取り入れている。建築や住宅に対する感性を心象表現の重要な要素として利用し、洗練された怪奇と幻想美を漂わせる世界を創り上げている。1929(昭和4)年の「本牧のピーナス」は彼の本牧時代を題材にしているが、彼の生活意識、空間意識を知る上で興味深い。

「私は少々便利は悪くても、文明の雑音の響いてこない、隣近所のない、静かな一軒家で、しかも出入りするごとに靴を脱いだり履いたりする煩わしさのない、粗末ながらも簡素な洋式生活のできる家を長い間探していたのであるが、とうとうどうにかこうにか、まずこの条件にかなうと言っていい家を見つけたのである。それは横浜本牧岬の、俗に八王子という村の西の海岸の谷間にある家で……」と、この家へのアプローチが続くが、この家の様子は西村のいうバンガローではないかと、その後の展開に引き込まれていく。

「その昼でも暗い梢のトンネルみたいな坂道をちょっと登ると、右手に私の家の管理人

の小さい家があり、その家の高い石垣の上に、私が借りた昔外人が住まっていたらしい古いバンガローがあった。 - 中略 - 昔は緑色だったらしいが、今では風雨にさらされて、どす黒くなったペンキ塗りの南京下見の家で、二、三段の木造ステップを登ると、そこが白いペンキ塗りの手摺りのあるポーチで、そのドアを開けると、かなり広い居間兼食堂、その隣りに小さい寝室と、水道の通った浴室と台所があった」。

廃屋に近いその家を自分の趣味に合わせて模様替えをしていく主人公の姿が妹尾自身のように描かれ、読者は次に起こる不気味な状況へと誘われていく。

「私はポーチの柱にいつも大きな鉄網の籠を掛けておいた。朝目を覚ましてドアを開けるといつもきまりきってその籠の中に新聞とパンとミルクが配達しており、午後外から帰てみると、その籠の中に生肉だの野菜だのが入ってあった。お金に余裕のある時は、舶来煙草の罐詰をたくさん買いためて引き出しにしまったり、ハムやベーコンを買い込んで、台所の天井に吊り下げたりした」。

このように西洋風の生活への思いは家に関するばかりではなく、主人公を西洋人のように行動させ、自分の好む西洋人像を主人公に投影させた。そして管理人との関係、過去の事件の告白、奇怪な終章へと話は進む。多くの場面でも巧みな建築空間描写が幻想性を高め西洋的な雰囲気醸し出している。

このような西洋人的生活への思い入れについて、妹尾韶夫の子息・丸夫氏は「父はイギリスかぶれでした。上海を除いて生涯一度も外国へ行ったことはありませんでしたが、翻訳の仕事から海外生活の情報を得ていました。肉を使った西洋料理の知識も、時々家族に作った西洋料理の手本も多分原書から学んだのでしょう」と語っている。

この「本牧のピーナス」において、妹尾はバンガローという言葉を使っている。本来的

なバンガローの意味が一般化されていたとは思えぬこの時期にあって、妹尾は的確にこれを理解している。バンガローを小説の中に取り入れた背景には、洋風住宅に関する豊富な知識があったと感じられる。

1932（昭和7）年9月、攻玉社学園からの退職金をもとに完成した自邸は、当時の典型的なバンガロー形式の住宅を考察する上で貴重な事例である。（図1）

## (2) 竣工時の妹尾邸

西村の推奨するバンガローと妹尾の嗜好と一致して作られたこの住宅は、どの部屋からも出入りが自由にできる幅広いヴェランダをもち、自然に親しむ郊外生活を満喫することができた。また玄関ドアが内開きである点にも注目したい。

構造：木造平屋建

敷地面積：103.5坪（342.149㎡）

建築床面積：20.75坪（68.48㎡）

家族構成：夫妻＋長男＋長女

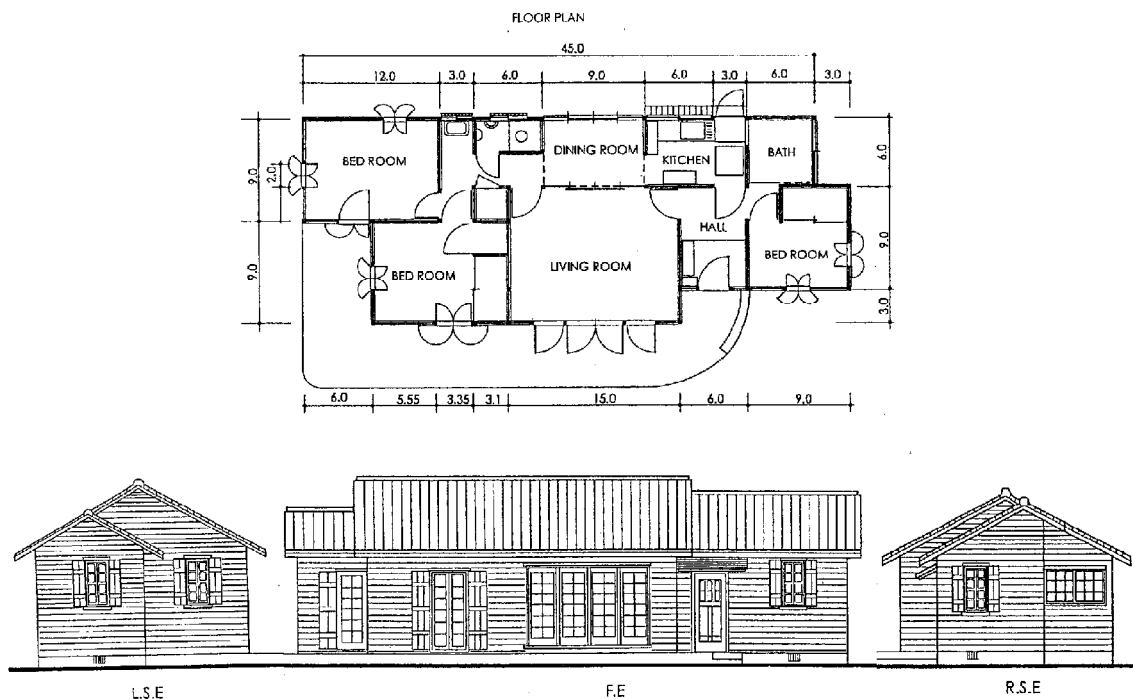
竣工：1932（昭和7）年9月

総工事費：約1765円

設計：西村建築株式会社

北側のベッドルームは書斎として韶夫が使用し、南側のベッドルームは洋室となっているが、実際には畳を敷き込んで家族の寝室としていた。玄関脇のベッドルームは女中室として使用された。居間の西南角には煙突付きの石炭ストーブが置かれ、冬の朝一番にストーブの火をつけることから妹尾家の一日が始まった。戦局が悪化するにしたがい石炭も入手困難となり、また鉄製品供出の気運に押されて10年後位にストーブを手放した。

妹尾韶夫(アキ夫)邸に示された西村伊作の住宅設計理念



妹尾家のヴェランダの生活(丸夫氏蔵)

(3) 増改築された妹尾邸

1935(昭和10)年韶夫の父が亡くなり,母との同居を整えるため既存住宅の西側に2階建ての増築が始まった.(図2)

構造:木造2階建

敷地面積:竣工時と変わらず

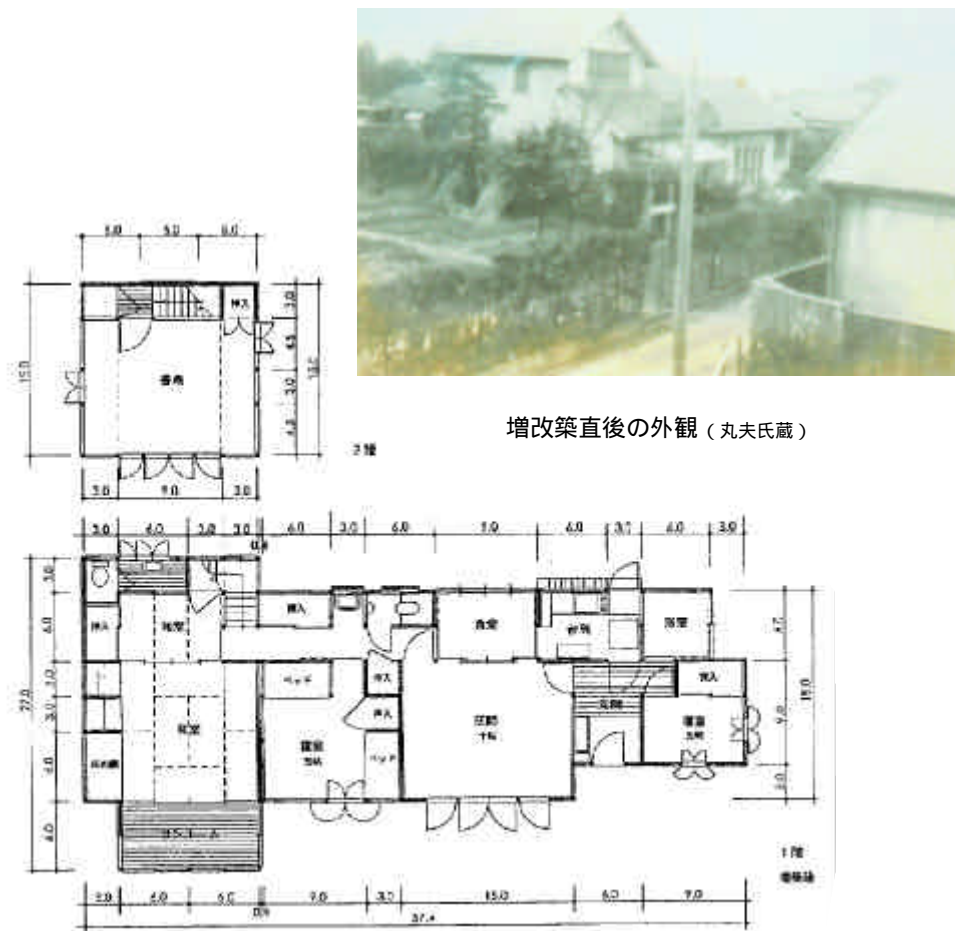
建築床面積:36.45坪(120.29㎡)

家族構成:夫妻+長男+長女+韶夫の母

竣工:1936(昭和11)年2月

総工事費:1240円

設計:西村建築株式会社



増改築直後の外観（丸夫氏蔵）

図2 増改築平面図（筆者作成）1936（昭和11）年



現在の外観（筆者撮影）2004（平成16）年



韶夫の書斎は2階に移った。独立性が高く明るいこの部屋を彼は大変気に入っていたという。何時の頃か書斎にベッドを持ち込み、一日中2階で過ごすことが多くなった。母の居室として和室を設けたためにすべてが洋室構成という形は崩れたが、書斎の増築は妹尾の「洋風住宅」好みを補完するものであった。

中流住宅における住宅の洋風化は応接間からはじまったといつてよいであろう。応接間は室内だけではなく和風本体の外観とも際だって異なり、そこだけは洋館のスタイルを現すことも多かった<sup>16)</sup>。応接間は書斎としても兼用され主人の教養を示し文化生活を感じさせる香りに満ちていた。思索、夢想のために外界を容易に受け入れない堅固な造り、そして鍵のかかるドアを備えた書斎の所有は、知識人、文化人の間では流行現象ともなった。

再び西村に設計を依頼して完成した書斎を得て、妹尾は翻訳ばかりでなく創作活動においても充実期を迎えている。「深夜の音楽葬」1936、「黒い薔薇」1937、「密室殺人」1937、

「カフェ奇談」1938、などを発表し、奇想的な情緒性溢れる作品を残している。

母の死により三世代同居は2年程で終わったが、その後次女、三女が生まれて家族6人の暮らしが続いた。次第に戦時色が強まる中で、執筆活動の場は狭められていった。そのためもあり一家は故郷・津山に疎開をした。戦後『宝石』『ロック』などの探偵小説誌が創刊されると、一家は本宅に戻り、妹尾アキ夫の仕事も再開された。しかし創作においては十分な作品を残したとは言い難いまま、1962(昭和37)年4月、韶夫は70歳の生涯を閉じた。

1963(昭和38)年に東側に貸し室3室を備えたアパートが増築された。この頃から娘たちはそれぞれに結婚し家を離れていった。

1966(昭和41)年、子息・丸夫氏は結婚し、これを機会に2階の書斎は彼ら夫婦の寝室になった。丸夫氏夫妻の一男一女は独立して、現在は夫妻二人が居住、この家の維持管理をしている。



図3 東側にアパートが増築された平面図(筆者作成)1963(昭和38)年頃

#### 4 おわりに

1962（昭和37）年4月19日、文芸家協会から古希の記念品を受け取る前日、妹尾は脳出血により急逝した。倒れて息をひきとった場所は、彼が最も気に入っていた書斎であった。時代の精神文化を象徴するかのような書斎は、室内外ともに竣工時と殆ど変わらぬ姿を今日も維持している。敷地地盤面は昭和50年代頃の周辺道路改修の影響でかさ上げされて、建設当初のヴェランダは地面とほぼ同じに埋もれてしまったが、西村の意図したバンガローの性格は大きく崩れてはいない。

近代住宅史を語るに相応しい状態で73年間の長寿命を可能にしたのは、この住宅のもつ品格とそれを理解した家族の住宅に対する愛着感であろう。また敷地条件の有利さもこの住宅の長寿命化させた要因になろう。東と南に各4mの道路をもつ角地で、日照、通風に恵まれ隣接住居の影響を受けないだけの広さをもち、かつ前面道路の交通量が少ないために良好な環境が保全されていた、などが安易な建て替えを阻止したとも考えられる。

自然と馴染む生活を愛し、物質よりは心の充実を求め、簡素な中に西洋文化、西洋の生活様式を受容した妹尾邸は、西村伊作の設計理念と重なり合って時代や世代を超えた共通精神の存在を感じさせる。

「世界に通用する日本人を目指すには住生活を洋式に変えなければいけない」そして「無用な装飾を避け単純で実用的な造形」を提唱した西村の設計理念は今日においても褪せることなく継承されている。

本研究に当たっては、三井ホーム・長寿社会研究所の支援をいただいた。また妹尾丸夫氏には一方ならぬ協力、ご教示をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

#### 脚注

- (1)1909（明治42）年『婦人之友』、1916（大正5）年『婦人公論』、1917（大正6）年『主婦の友』などの女性誌が、1921（大正10）年には文芸誌『明星』が再刊（創刊は明治33年）された。
- (2)1915（大正4）年国民新聞社主催「家庭展覧会」、1920（大正9）文部省主導の「生活改善同盟」、1921（大正10）農商務省の外郭団体「世帯の会」などが相次いで設立された。また1922（大正11）年の東京府主催「平和記念東京博覧会」における「文化村」は新しい住宅のあり方に多くの示唆を与えた。1917（大正6）年住宅設計施工会社・あめりか屋の「住宅改良会」が設立された。
- (3)「スイートピー」1927「凍るアラベスク」1928、「恋人を喰う」1928、「壺から出た手紙」1929、「本牧のヴィナス」1929、「夜曲」1930、「高い夜空」1931、「アヴェ・マリア」1932、「密室殺人」1937、「黒い薔薇」1937、「リラの香のする手紙」1952、など。
- (4)鮎川哲也『幻の探偵作家を求めて』晶文社、1985、p.178
- (5)中島河太郎編『新青年ミステリー倶楽部』青樹社、1986、p.264
- (6)1904（明治37）年に洋食屋「太平洋食堂」を地元・新宮で開き、料理、建築、インテリア、貧民救済、啓蒙活動など彼らの関心事を統括した事業を試みた。
- (7)加藤百合『大正の夢の設計家』朝日新聞（朝日選書）、1990、p.69
- (8)西村伊作『楽しき住家』警醒社、1919、p.6
- (9)小樽山ルイ『アメリカの婦人宣教師』東京大学出版、1992、p.32
- (10)前出(8)、p.9
- (11)『田園小住家』警醒社、1921、『生活を芸術として』民文社、1922、『装飾の遠慮』1922、文化生活研究会、『明星の家』文化生活研究会、1923、『我子の教育』文化生活研究会、1923、『我子の学校』文化生活研究会、1927 など
- (12)田中修司『西村伊作の楽しき住家』はる書房、2001、p.11
- (13)前出(8)、p.133
- (14)雑誌『住宅』あめりか屋、1916年10月号、p.7
- (15)前出(14)と同じ
- (16)大正初期に従来の和風住宅の一部に洋館を加えた「中廊下式住宅」が生まれた。洋館は応接間として多くは玄関脇に設けられ、この住宅形式は昭和の戦後まで広く普及した。